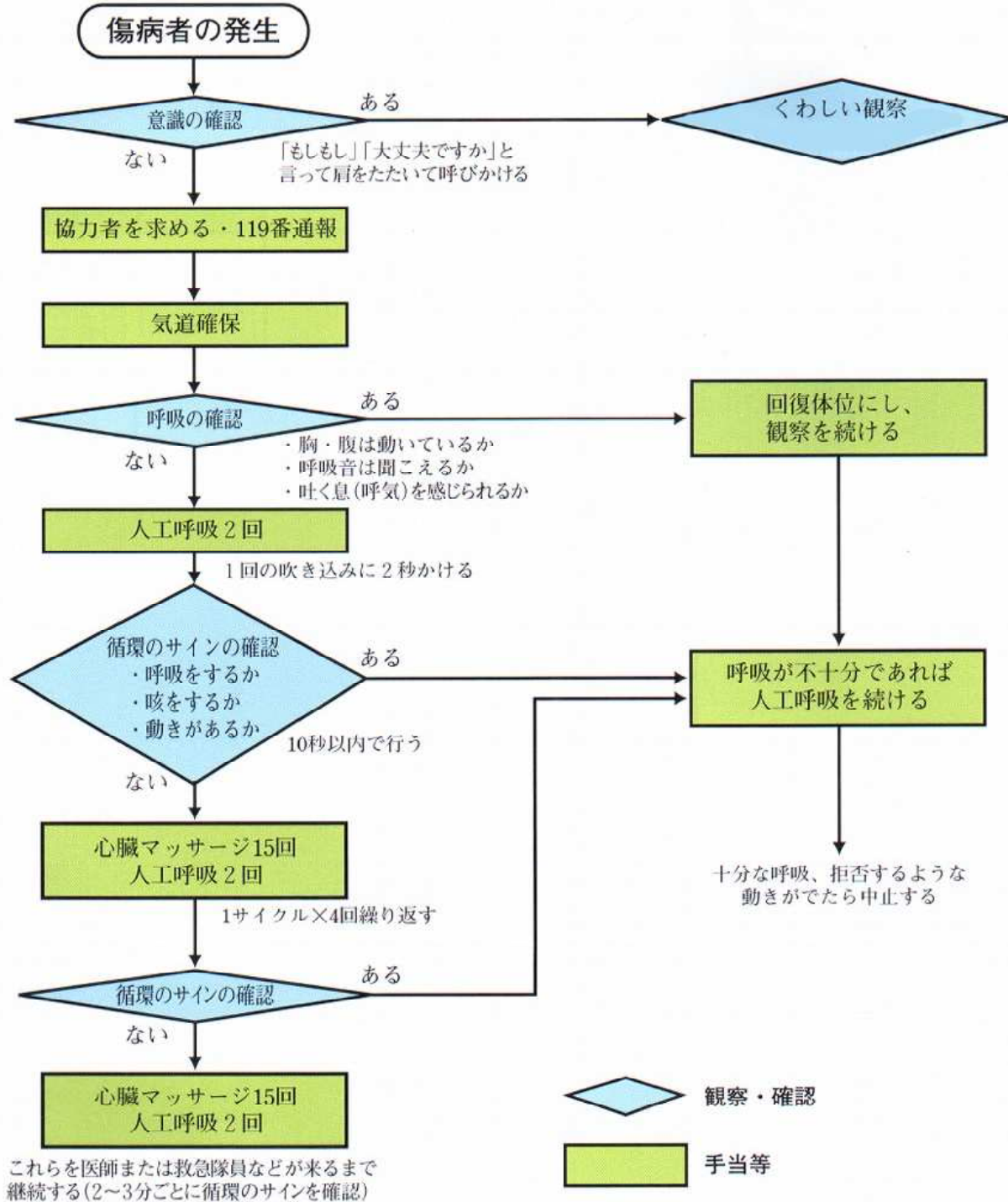


発達段階	高等学校	教科等	地理		
タイトル	地震と地形				
実施日(月日)					
所要時間	5分	15分	10分	10分	10分
展開	導入	展開			作業・まとめ
達成すべき目標	断層や断層地形への興味関心をもつ	断層、断層地形についての基本的知識を理解する	・地形をつくる力としての内的営力を理解する ・世界や日本の地震の分布を知り、地震と断層の関係について考え、理解する	地形図で断層地形を読む	近畿地方の活断層分布を知り、奈良県で地震が起こる可能性について考える
生成物	断層や断層地形への興味関心	断層、断層地形についての基本的知識を整理、記入	地震と断層の関連についての基礎知識	地形図で断層地形を読む力	近畿地方の活断層の分布の理解
学習単位	全体	全体	全体	グループ・全体	全体
進め方	・断層、断層地形の写真をみて考える。 どんな地形か。(地形の特徴の読みとり) どうしてこのような地形ができたのか考える。 ・気付いたこと、自分の考えや知っていることを各自ノートに書く。	・写真について各自が発表する。 ・意見を聞き、地形の成因について考える。 ・断層地形について理解する。(断層の成因、断層の分類、断層地形)	・地形をつくる力(営力)について確認する。 (プレートテクトニクスについて復習する。) ・地震の種類について理解する。 (*地震の原因である岩石破碎については定規で説明) ・日本が世界の中でも地震多発地帯であることを確認する。	・断層地形の特徴を読み取る。 (*奈良県全体の地形を読む必要はない) ・地形図中の断層地形をグループで探し、発表を行う。 ・地形図で断層地形を確認する。	・日本の代表的断層を知る。 ・奈良県の白地形に活断層を記入する。 ・奈良県で地震が起こる可能性を考える。 (*第2次奈良県地震被害想定調査報告書の一部を提示する)
ツール(準備物)	・資料「地震と地形」		・資料「世界のプレート境界線・海溝と海嶺」 ・プラスチックの定規(岩石破碎の説明用)	奈良県の地形図 2万5千分の1 (例:大和郡山)	・資料「近畿地方の活断層分布」 ・奈良県の白地図
場所	教室				

発達段階	高等学校	教科等	保健体育
タイトル	災害に自立的に対応するための応急手当の方法を身に付ける(心肺蘇生法実習)		
実施日(月日)			
所要時間	30分～60分	90分～180分	20分
展開	講義	実習	まとめ
達成すべき目標	迅速な応急手当の必要性を認識する	心肺蘇生法などの基本的な応急手当の技能を習得する	地震災害発生時の初期対応に必要なことを認識する
生成物	応急手当の必要性を理解	実習による意欲の向上	災害発生時の対応を理解
学習単位	全体	グループ(5～10人)	全体
進め方	<p>ゲストティーチャーの講義を聞く。</p> <p>フローチャート図などから適切な応急手当の流れを理解し、心肺蘇生や止血・搬送に関する注意事項を理解する。</p>	<p>傷病者の状況に応じた応急手当が施術できるように、様々な応急手当の基礎知識について実習する。</p> <p>(心肺蘇生法を中心とした応急手当の手法の習得、時間的余裕があればAED(除細動器)の知識も併せて講義や実習をする。)</p>	<p>グループの代表が模範演技をして、実習の成果を出し合う。</p> <p>地震発生時に負傷者が出た場合にも初期対応が大切であることが理解でき、使命感・責任感をもって人命救助ができるか確認する。</p> <p>(ゲストティーチャーの授業の感想を書きまとめる。)</p>
ツール(準備物)	<p>・ゲストティーチャー(消防・救命救急士、日本赤十字の救命講習指導員、医者等)</p> <p>・資料1 参考資料:救急法講習教本(日本赤十字社)生徒への配布小冊子「とっさの手当がいのちを救う 救急車がくるまでに…」「救急法の基礎知識～備えあれば安心～」「知っていれば安心です - AEDを用いた除細動 - 」(以上、日本赤十字社)</p>	<p>・実習用具、ダミー(人体模型)、フェイスシールド又は消毒用アルコール、*AED</p> <p>・資料2「倒れている人をみたら」(東京消防庁HPより)</p>	
場所	体育館		

心肺蘇生法の手順



救急法講習教本(日本赤十字社)より

発達段階	高等学校	教科等	建築計画		
タイトル	地震と建築物(わが家の耐震性を知る)				
実施日(月日)					
所要時間	5分	10分	15分	15分	5分
達成すべき目標	地震時に建物はどのように揺れるか認識する	建物倒壊による死傷者がなぜ多いかを認識する	近代建築と神社仏閣等に見られる古建築との耐震に関する工夫と木造建築の特徴を知る	身の回りにある建築物について、防災に関する工夫を知る	非常時の対応を知る
生成物	建物の揺れの認識	過去の地震の建物への影響の理解	日本の建築物の特徴についての理解	これからの建築物、特に耐震性の必要性の理解	・とっさの判断の重要性の理解 ・日ごろからの備えの必要性の理解
学習単位	全体	全体	全体	個人	全体
進め方	内陸型地震と海溝型地震の揺れの違いを知る。	阪神・淡路大震災から、死傷者の大部分が建物崩壊によるものであることを理解する。 「わが家の耐震診断ガイドブック」を活用し、日本の木造住宅の欠点を理解する。	・「超高層をつくる技術の中の五重塔から学ぶ」を見る。 ・超高層の近代ビルが地震に対してどのように揺れを押さえられているのか。 ・千数百年前の木造建築物が今なお、残っていることから、古来より地震に対する考えについて、理解する。 ・西洋建築を模倣した、明治建築におけるレンガ造の失敗についても理解する。	耐震的な考えと、免震的な考え方を学び、日本の木造住宅の弱点について見直し、耐震改修やこれからの住宅の考え方を理解する。 (インターネットを活用した耐震診断も可能)	地震発生時に、どのような対応が必要か、とっさの時に的確な判断を下すことの大切さを考える。
ツール(準備物)	コンピュータ	コンピュータ 阪神・淡路大震災の被害写真(コンピュータ画面上に被害写真を映し出す) 奈良県土木部建築課製作「わが家の耐震診断ガイドブック」 <a href="http://www.pref.nara.jp/kenchiku/mati/taishin/gidebook.pdf">http://www.pref.nara.jp/kenchiku/mati/taishin/gidebook.pdf</a>	コンピュータ 五重塔の写真(建築会社のHP <a href="http://www.kajima.co.jp/gallery.const_museum/kousou/gijyutu/index.html">http://www.kajima.co.jp/gallery.const_museum/kousou/gijyutu/index.html</a> より、超高層ビルや五重塔の揺れのシュミレーションを見せる)	コンピュータ 住宅のパンフレット等(日本建築防災協会のHP <a href="http://www.kenchiku-bosai.or.jp/wagayare/taisin_flash.html">http://www.kenchiku-bosai.or.jp/wagayare/taisin_flash.html</a> を活用し、耐震チェックプログラムを実行する)	
場所	コンピュータ室				

発達段階	高等学校	教科等	特別活動	
タイトル	奈良県の災害の歴史を調べる(地震について)			
実施日(月日)				
所要時間	5分	30分	10分	5分
展開	導入	調べ学習、発表	話し合い	まとめ
達成すべき目標	地震のメカニズムを確認し、本時の目標を確認する	奈良県の地震災害の歴史を調べる	絵図をもとに、過去の地震の様子を考える	奈良県が地震災害と無縁でないことを確認し、地震に備えることの大切さを知る
生成物	奈良県で発生した地震についての関心	奈良県の地震災害の歴史の整理	絵図の示している内容の整理	・地震に対する備えの大切さの理解 ・奈良県における地震災害のイメージ
学習単位	全体	グループ・全体	グループ・個人	全体
進め方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈良県は地震が多いか少ないか考える。 ( *イメージとしてどうか、発問する )</li> <li>・地震はどんなところでよく起こるのか確認する。</li> <li>・最近のニュースプリントで、過去において奈良県でも何度も地震があったことを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈良県の地震跡を確認する。</li> <li>・班別に、奈良県の災害史のなかの、地震について調べる。 (いつ、どの地域で、どれくらいの大きさで、どんな被害が起こったか。)</li> <li>・班別で発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵図が何の様子を描いているのか考える。</li> <li>・地震が起こったときどんな災害が起こるか考える。</li> <li>・文書に込められている作者の思いを話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈良県の災害の歴史を通して、活断層の動きが活発化していることや、地震への備えが大切であることを知る。</li> <li>・想定される被害の概要を知る。</li> </ul>
ツール(準備物)	奈良県の地震跡についてのニュースプリント	コンピュータ、関連書籍 ホームページ	ワークシート	第2次奈良県地震被害想定調査報告書(概要版)
場所	図書室、コンピュータ室等			

## 遺跡に残る地震跡 (奈良県の地震跡のニュース)

奈良高松塚古墳 過去「東南海・南海」で被害？

極彩色壁画の奈良県明日香村、高松塚古墳（8世紀初め）の墳丘東側で、過去の地震による亀裂が見つかり、文化庁が16日、発表した。築造以降9回起きた東南海・南海地震の影響と推定される。亀裂は未調査部分を含め墳丘全体に広がり、築造時に比べて墳丘がもろくなっている可能性があり、文化庁は早急な対策を迫られそうだ。

文化庁によると、墳丘東側4か所で最長1・5メートル、最大幅5センチの亀裂計24本を確認。3～1センチのずれを生じた断層も見つかった。紀伊半島から四国の沖が震源とされる宝永地震（1707年）や安政南海地震（1854年）では、奈良県でも家屋倒壊など被害があったと伝えられる。ただ、どの地震でどのずれを生じたのかは不明。

(2005.3.17 読売新聞)

森カシ谷遺跡で地震跡

奈良県高取町の森カシ谷遺跡で、飛鳥（7世紀）から室町時代（14世紀）の間に起こった地震による地割れ跡が、同町教委の調査で見つかった。マグニチュード（M）8クラスで日本書紀にも記された「南海地震」の痕跡の可能性もあるという。古代に飛鳥地方が大規模な地震に襲われたことを示す、興味深い資料になりそうだ。

町教委が遺跡調査中に発見。長さ5 - 10メートル、最大幅1メートルの亀裂が南北方向に数本あり、人為的に掘った形跡がなく、地震による地割れであることが判明。地震後の大雨で、亀裂がさらに広がった可能性もあるという。土器などが出土しなかったことから、発生時期は特定できなかった。

南海地震では奈良県でも場所によっては震度5強の激しい揺れが起きるとみられ、花こう岩が風化した比較的もろい同遺跡付近の地盤では、亀裂や地滑りが起きやすいという。

日本書紀には、684年に「大地震があった。国中の男も女も逃げまどい、山は崩れ河はあふれた」と記述。地震の周期などから、南海地震は飛鳥時代にも起こっていたことが推定されている。

(2004.11.5 産経新聞)

古墳に地滑り跡

2月25日、奈良県天理市の「赤土山古墳」に大規模な地震による地滑りの痕跡があることがわかった。同古墳は、2カ所の造りだしがついた特異な形である上に、墳丘の形や埴輪の位置などで不可解な点が多く、前方後円墳か前方後方墳か議論されてきた。しかし、市教委によると、大規模な地震による地滑りの影響とすれば不可解な点も説明でき、調査でもとの形状が判明する可能性もあるという。これまで地震で古墳の形状が変わった例では、石室が上下に大きく食い違っていた神戸市の「西求塚古墳」や大阪府池田市の「娯三堂古墳」などがある。

(2002.4.24 奈良新聞)

## 奈良県と地震

### 1. 「奈良県は災害が少ない」というのは本当？

最近の地震は？

### 2. 地震の起こりやすいところとは、どんなところ？

地震発生のメカニズム

どんな地形のところだろうか？

活断層の分布は？

### 3. 地震（災害）の歴史

古代の記録に残る地震災害の記述は？（西日本、奈良を中心に調べてみよう。）

例

（允恭 5年）= 416年

遠飛鳥宮付近（大和）：「日本書紀」に「地震」とある。

史書に現れた、日本最初の地震記述（記録）といわれている。

（推古 7年）= 599年

大和：倒潰家屋を生じた。（日本書紀）

地震による被害の記述（記録）としては日本最古のものといわれている。

（近いできごと：593年に聖徳太子が摂政になっている。）

（天武 13年）= 684年

「土佐その他南海・東海・西海地方：山崩れ，河湧き，家屋社寺の倒潰，人畜の死傷多く，津波来襲して土佐の船多数沈没．土佐で田苑 5 0 万余頃沈下して海となった。」（「日本書紀」）

（近いできごと：天武天皇の治世、684年 八色の姓の制定）

（大宝 1年）= 701年

丹波（京都府北部）：地震うこと 3 日．若狭湾内の凡海郷が海に沈んだという「冠島伝説」がある。（近いできごと：701年 大宝律令施行）

（仁和 3年）= 887年

五畿・七道で地震：京都で民家・官舎の倒潰多く，圧死多数．津波が沿岸を襲い溺死多数。

（近いできごと：平安時代 宇多天皇の治世 887年 藤原基経が関白就任）

発達段階	高等学校	教科等	特別活動			
タイトル	奈良県における地震被害を知ろう - 第2次奈良県地震被害想定調査報告を通して -					
実施日(月日)						
所要時間	5分	10分	5分	5分	15分	10分
展開	導入	説明及び確認				まとめ
達成すべき目標	大規模地震発生時の実態を知る	第2次奈良県地震被害想定調査の目的を理解し、ターゲットとなる震源を理解する	震度階級により、どのような現象や被害が発生するかを理解する	内陸型地震及び海溝型地震発生時の被害の特徴を知る	各断層帯および海溝型地震発生時における揺れ、液状化危険度を知る	被害想定結果を振り返り、21世紀を生きる若者として、災害発生時にどのように生き抜くかを考える
生成物	大規模地震による被害状況の理解	海溝型地震5パターン、内陸型地震8断層の確認 (海溝型地震:発生確率が高いが、被害規模は小さい。内陸型地震:発生確率は低い、被害規模は甚大)	震度階級による被害状況の違いの理解	内陸型地震及び海溝型地震発生時の被害の特徴の理解	各断層帯及び海溝型地震の想定マグニチュードによる県内の震度及び液状化危険度の確認	・防災意識の高まり ・災害発生時には主体的に行動しようとする態度、意欲
学習単位	全体					
進め方	阪神・淡路大震災、新潟県中越地震の被害の様子をホームページ上の写真(阪神・淡路大震災写真で多くのページが検索可。新潟県中越地震は、 <a href="http://www.ajiko.co.jp/bo-usai/tyuetsu/tyuetsu.htm#high">http://www.ajiko.co.jp/bo-usai/tyuetsu/tyuetsu.htm#high</a> など)で確認する。	1 第2次奈良県地震被害想定調査をホームページで確認する。 (インターネット検索:奈良県くらしの情報「防災」防災 第2次奈良県地震被害想定調査 概要版(HTML形式) はじめに、1想定地震) 2 画面(スクリーン)や配布プリントを参考にターゲットとなる断層等の名称をワークシートに記入する。	気象庁震度階級関連解説表をもとに、それぞれの震度における人、家屋、ライフライン等の被害状況を確認する。 (概要版(HTML形式) 気象庁震度階級関連解説表)	1 それぞれの地震発生時における人的被害、建物被害、ライフライン被害の状況を理解し、最初にみた阪神・淡路大震災等による被害状況に重ね合わせる。 (概要版(HTML形式) 2被害の特徴) 2 被害の特徴をワークシートに記入する。	1 それぞれの地震発生時における状況を知り、先の震度階級関連解説表と重ね合わせ、学校や自宅付近の状況を考える。 (概要版(HTML形式) 3揺れと液状化) 2 どのような感想をもったか、何を学んだかについて、ワークシートに記入する。 3 学校から自宅までの交通機関はどのようになるか考える。	・地震被害想定結果の確認し、意見を出し合う。 ・地震被害想定結果の中で、疑問に思ったこと、興味をもったことなどをワークシートに記入する。 ・災害に対する備えの大切さや災害発生時には自分たちが主体的に行動しなければならない年代であることを理解する。
ツール(準備物)	(教室の場合インターネットが可能なコンピュータ、プロジェクター、スクリーン)	奈良県学校防災教育推進プラン防災計画編(P.3~P.8)を印刷したプリントワークシート				
場所	コンピュータ室または教室					



奈良県における地震被害を知ろう - 第 2 次奈良県地震被害想定調査報告を通して -

年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

1 地震被害想定の対象地震を確認しよう

(1) 内陸型地震 ( 8 断層 )

	対象地震
	断層帯
	断層帯
	断層帯
	断層帯
	断層帯
	断層帯
	断層帯
	断層帯

(2) 海溝型地震 ( 5 パターン )

	対象地震



2 内陸型地震及び海溝型地震発生時の被害の特徴をまとめよう

	内陸型地震 ( 奈良盆地東縁断層帯 )	海溝型地震 ( 東南海・南海地震同時発生 )
地震動 ( 震度 )		
液状化発生		
人的被害 ( 死者 )	人	人
( 負傷者 )	人	人
建物被害 ( 全壊 )	棟	棟
( 半壊 )	棟	棟
避難者数	人	人
道路・鉄道等の状 況と影響		

\* 避難者数：1 週間後の想定人数

3 奈良県地震被害想定調査結果を知って



(1) どのような感想をもちましたか。

(2) 学んだことはどのようなことですか。

(3) 交通網が寸断した場合、あなたはどのようにして帰宅しますか。

(4) 疑問に思ったこと、特に興味をもったことはどのようなことですか。



発達段階	高等学校	教科等	特別活動				
タイトル	21世紀前半の地震活動期を生き抜こう - 震災直後から数日間の生活について -						
実施日 (月日)							
所要時間	15分	10分	10分	15分	50分～ (課外学習も可)	40分	10分
展開	話し合い(災害初期対応の確認)		話し合い(交通機関寸断時の備えの確認)	グループ別話し合い(避難所での対応等)	調べ学習	プレゼンテーション	まとめ
達成すべき目標	地震発生時の初期行動を理解する		交通機関が寸断した場合の対応(家族との連絡の仕方、帰宅方法)を考える	震災直後や避難所での生活を想像し、災害時の適切に対応するための心構えを考える		様々な立場での災害対応を考える	地震被害を軽減するための備えについて考えるとともに、災害時に適切に対応する社会人になることを確認する
生成物	地震発生時別の対応スキル(学校・自宅)	地震発生時別の対応スキル(その他)	交通機関が寸断した場合の対応を理解し、日頃から災害に備えようとする態度	避難所で主体的・積極的に行動しようとする態度	グループでの役割に対する責任感及び活動の意欲	・プレゼンテーションのための工夫 ・災害対応を自分の問題とする態度	・地震被害を軽減するためのスキル ・地震活動期を、自立的に生きようとする態度
学習単位	全体	全体	全体	グループ	グループ	全体	全体
進め方	<p>奈良県内で内陸型地震(震度6強)が発生した場合の対応について、それぞれの危険を予測しながら話し合う。</p> <p>在校中 ア、授業中(教室・特別教室など) イ、休み時間(廊下・階段を移動中) ウ、グラウンド・体育館等 自宅にいるとき ア、真夜中 イ、夕食時 ウ、入浴中 など 時間経過に従って、適切な対応をシミュレーションする。</p> <p>電車・バス等に乗っているとき 自動車・バイク等を運転しているとき 川、海辺にいるとき 地下街にいるとき 高層ビル内 など</p>		<p>奈良県内で地震が発生し、自宅から離れた(通勤、通学が可能な範囲)学校または職場にいる場合の対応について考える。</p> <p>家族への連絡のとり方 交通機関が寸断した場合の帰宅方法 ・方法とともに、どのような備えが必要であるかを話し合う。</p>	<p>5グループに別れ、それぞれのテーマについて、適切な対応・スキル・配慮すべきことなどを話し合う。</p> <p>調べ方、発表するため準備等について相談し、グループでの役割分担を行う。</p> <p>テーマ例 非常持ち出し品 水・食料の確保と調理方法 避難所生活でのルールづくり 自分たちができる活動 a: 幼児や高齢者を対象に何かできることはないか b: 避難所の運営に寄与(主体的に運営するとしたら) など</p>	<p>グループの計画にしたがって活動し、発表の準備をする。</p>	<p>各グループ、最高8分でプレゼンテーションを行う。</p> <p>各グループの発表を聞く。</p>	<p>災害発生に対し、何を学べばいいのか、何ができるのかを考える。</p> <p>防災のための学習を今後の生活に生かすことを確認する。</p>
ツール (準備物)	<p>・奈良県学校地震防災教育推進プラン ・気象庁震度階級関連解説表 ・災害伝言ダイヤル等のHP</p>						
場所	教室				教室・図書室・コンピュータ室等	教室	

発達段階	高等学校	教科等	特別活動			
タイトル	被災者等の手記に学ぶ(A) 命と心					
実施日(月日)						
所要時間	事前準備	5分	20分	15分	10分	HR後
展開		導入	グループごとに手記を読む	全体で発表する	結び	
達成すべき目標	グループ分け 生徒を「被害」「自助」「共助」「公助」「ボランティア」「感動」等、6～8のグループに分ける。  手記集の準備 Webサイト「阪神大震災を記録しつけて」第1集～第3集から、被災場所や時間、立場や視点の違う手記を5編程度を選び、印刷。(別紙A) <a href="http://www.npo.co.jp/hanshin/">http://www.npo.co.jp/hanshin/</a>	グループごとの課題と作業内容の把握	各グループごとの視点に沿って手記を読む	時間の流れに沿ったプレゼンソフトの写真にあわせて発表し、命や助け合う心の大切さを理解する	本時の学習を踏まえた今後の課題を見つける	1 大きめの付箋紙を貼付した模造紙は継続して教室の後ろに掲示する。  2 休憩時や放課後にそれぞれに模造紙を見て、感想や意見を色の違う大きめの付箋紙で貼り加える。
生成物		被災者等の手記に学びながら防災について考える意欲	・時系列に並べた大きめの付箋紙(手記の抜粋・まとめ) ・被害状況を書き込んだプレゼンソフト	・発表会 ・大きめの付箋紙を貼り付けた模造紙	継続して防災学習に取り組む意欲	3 各グループの今後の学習課題については、グループごとに十分に話し合い、教員の助言を経て決定する。
学習単位	プレゼンソフトの準備 インターネット等を利用して、阪神・淡路大震災の発生から復興までの様々な写真を集め、時間の流れに沿ってプレゼンソフトに貼り付ける。 *「阪神大震災の傷痕」 <a href="http://www.ceres.dti.ne.jp/~miyazawa/menu/gallery/">http://www.ceres.dti.ne.jp/~miyazawa/menu/gallery/</a> 「阪神大震災の記録」 <a href="http://cat.zero.ad.jp/~zas96569/">http://cat.zero.ad.jp/~zas96569/</a>	全体	グループ	全体	全体	
進め方	模造紙の準備 模造紙2枚を横につなぎ、横軸:場面、縦軸:時間として、大きめの付箋紙を貼り付ける模造紙を作成。  HR運営委員会(必須) 各グループのリーダーを集めて、HRの目標やグループごとの作業等を十分に説明。	本時の課題と作業内容の確認する。  各グループの視点 「被害(建物や人)」「自助(避難・筆者の行動)」「共助(救助・援助)」「公助(消防・警察・自衛隊・行政等)」「ボランティア」「感動(深く心に刻まれた思い・感謝)」	・各グループごとに視点・課題に沿って手記を読み、大きめの付箋紙に抜き書き(まとめ)、時系列で並べる。 ・「被害」グループには、教員が作成したプレゼンソフト(時系列に写真を配置したもの)に、おおよその時間経過及び被害状況を入力する。	「被害」グループ1名 作成したプレゼンソフトを使って、被害の状況を発表する。  他のグループ1名 プレゼンソフトの画面に合わせて、大きめの付箋紙にまとめた内容を順次発表する。  大きめの付箋紙の貼付 各グループの発表と並行して、各グループ1名が教室後ろに張り出した模造紙に読み上げた大きめの付箋紙を貼り付ける。	今後の学習についての計画を理解する。  グループの代表 学習の成果・感想と今後、発展させていきたい学習課題を発表する。	(例) 「被害」:奈良県の被害想定、被害の例とメカニズム 「自助」:危険箇所の点検、避難方法 「共助」:救急法、援助 「公助」:ライフライン、救助、消火 「ボランティア」:このテーマは、「感動」と合わせて、今後、クラス全体で数時間かけて取り組むことにする。(指導案B参照) 「感動」:出会い、学び、つながり、メール等による被災者やボランティアグループとの交流
ツール(準備物)		グループ分の手記 ワークシート	大きめの付箋紙(被害グループにはコンピュータ)	プレゼンソフト・模造紙		
場所	教室(プレゼンソフト使用のため、プロジェクター・スクリーン等を用意)					

「被災者等の手記に学ぶ (A) 命と心」

出典：阪神大震災を記録し続ける会HP <http://www.npo.co.jp/hanshin/>

\*教材化に当たって、原文の一部を省略しています。

手記 1

別れの手紙

K・K (女性) 22歳 看護婦 神戸市中央区

それは予想もできないできごとだった。前日の16日、私は風邪をこじらせ40度の熱を出し、仕事を休んでいた。1月17日5時30分、いつものように目覚しが鳴り、いつものように朝が始まるはずだった。熱のためか頭はボーッとしており、まずはお茶を飲もうと湯呑みをもった瞬間、「グラッ」と揺れを感じた。私はそんなに熱が高いのかしら、座っているのに立ちくらみが、と思った。だがすぐに違う、地震だという冷静な気持ちと、夢だ、何かの間違いだという思いで混乱した。一回目の揺れから数秒後、電気はすべて消えた。静かな闇の中で、物が落ちてくる音だけが不気味に響いていた。

激しい揺れが続いた。私には、その時間がどれくらいであったのか思い出せない。おそらく数十秒に違いなかっただろう。だがとてつもなく長く感じた。もうダメだ……と真剣に考えた。

私が住んでいるのは、新神戸駅にほど近い看護婦寮である。皆が思い思いに話をしていたが、ほとんどが仕事場である病院の話であった。そこにはまだ深夜勤をしている看護婦と、そして多くの患者が不安に震えているに違いなかった。私は正直なところ深夜勤でなくてよかったと思った。不謹慎だとは思いますが、新人の私には足を引っ張るだけで何も出来なかっただろう。私は、とにかく行かなければ、病院に行かなければ、と思った。熱があることなどすっかり忘れていた。

外がほのかに明るくなってきて部屋へ戻った。時計は6時30分を指していたが、さっきまで動いていたはずの目覚しは5時46分を指して止まっていた。寮を出る前に公衆電話から実家に電話した。「今朝、地震があったの。ものすごかったの。火事も出てるけど私は大丈夫だから。仕事に行くからテレビ見といて」と短い言葉だったけれど、母にとってこの電話は私の消息を知るありがたい電話だったと言う。その後、数時間、電話は全く通じなかった。

私は寮の前に止まっていたタクシーに先輩5人と乗り込んだ。タクシーは、いつもと同じ道を通っているのに、それは全く違う光景だった。私は戦争を知らずに育ったが、戦後のようだった。

信号機は全て止まり、車がメチャクチャに走行していた。タクシーの中でラジオを聞いたが、アナウンサーは興奮のあまり声がうわずっていた。ビルはおもちゃのように壊れ、神戸大橋につながる高速道路の支柱はぐにゃと曲がっていた。さいわい、神戸大橋は落下していなかった。神戸大橋を渡りきりポートアイランドへ入ろうとしたが、そこはまるで湖のようで、車が通れるとは思えなかった。後ろからどんどん車が詰めてきた。その中には救急車もいた。私たちはそこから歩いていくことも出来なかった。車は水びだしになり、車からも降りられない状態だった。

するとタクシーの運転手さんが「(病院まで)行ってあげよう。どうせこの車は廃車にする予定やし、あんたら看護婦やろ、今はあんたら5人が病院の戦力や」と、デコボコで水びたしの中を車を走らせてくれた。私は水びだしの島を見て沈むかもしれないと思った。私たちの車に続く車はいなかった。後で聞いた話だが、すぐその後、橋は通行止めになったらしい。運転手さんはどうしたのだろうか。

どうにか病院に着いたが、自家発電しているはずの病院は真っ暗で、てすりだけを頼りに病棟まで昇った。病棟には青ざめた顔の夜勤の看護婦と、隣の寮から駆け付けた看護婦がせかせかと働いていた。

ベッドはストッパーがかかっていたのに移動し、あらゆる物が落下し破損していた。その片

隅に患者は集まり震えていた。幸いにも怪我や急変した患者はいなかった。看護婦という使命感と余震に対する不安と恐怖感、これからどうなるのかわからなかった。水も電気もつかないし、病院はどうなるのだろうと真剣に思った。昼前後だったと思うが電気がついた。水は蒸留水のボトルを使用した。昼前にはほぼ半数のスタッフがそろい少し安心した。

それから数日間をどう過ごしたか定かではない。とにかく無我夢中だった。一カ月は暖房もきかず、水もない病院らしくない病院だった。しかし、一人一人の責任感とアイデア、温かいボランティアの方々ののおかげで無事に経過した。私は看護婦という仕事でなければすぐに神戸を離れたらろう。それは家族も同じで親も帰って来いとは一言も言わなかった。

地震から一カ月半、私の所に一通の手紙が舞い込んできた。それは付き合っていた彼氏からの別れの手紙だった。私は一カ月、自分のことに一生懸命だった。彼の家は明石で被害はなかった。地震の後、一度だけ会った。私は私の生活で精一杯。普段の生活をしている彼とは考え方も違っていったと思う。

しかし私には、一番彼が必要だった。私は全国から駆けつけてきてくれるボランティアの人々や、世界各国から寄せられる救援物資など、人の温かさに支えられ涙の出る思いで毎日過ごしていた。

手紙は地震のように突然で信じられなかった。涙さえ出てこなかった。私は地震で様々なものを失い、一番大切だと思っていた人の心も失った。

地震後、街は復旧してきているが、人の離れていった気持ちはもう元には戻せない。私は今仕事とホテルオークラのファイトの文字、そして大勢の人に励まされ神戸っ子の意気で頑張っている。

第1集「被災した私たちの記録」

## 手記2

## 地震で得たもの

K・S(男性) 40歳 小学校教諭 西宮市

1995年1月17日午前5時46分に、それは起こった。生まれて初めて経験するすさまじい揺れの中で、できた事といえば、ただ長女の上におおいかぶさり、同時に妻の名を呼ぶことだけだった。

わずか数十秒のでき事なのに、まるで夢の中に漂っているような非現実感を持ちながら、しばらくはボー然としたままで、全く動けなかった。やがて妻の叫び声で我にかえり、家の中を見てまわる。全ての立体物がまぜこちゃに倒れ、いたる所にガラスの破片があり、素足では通れない状態だった。

そしてただちに実家へと向かう。うねりと亀裂の走った道や倒壊家屋のために、何度も道を変更しながら、やっとたどりつき、無事を確認しあう。間もなく青果卸売市場から、父と弟がとんでやってきた。市場は全滅だと興奮してしゃべる父も、母の無事な姿を見て、次第に落ち着きを取り戻してきた。

午前7時すぎ、勤務先の小学校に向かう。普段の3倍の時間がかかる。到着してみると、ほこりと血と怒声と涙声の避難者でごったがえしていた。しかしその一方で、無表情に無言という感じの人達もかなりいた。

自分の家と同じようにめちゃくちゃになっていた職員室を片付けながら、午前9時頃、校区内へ出かける。空襲という体験はないのに、おそらく空襲されたらこんな感じになるのだろうと直感させる程の町の様子であった。

あちこちに人が集まり、ひきつった表情で話していた。不思議な事に今まで見た事もない人達が私にも気軽に話しかけてきた。動きのある人ばかりは、生き埋めになった人達の救出作業だと、その人達が教えてくれた。

その作業に加わり、生まれて初めて遺体を触る。その作業を指示していた家族の人達も、すでに諦めきった表情で淡々としているのには、驚かされた。掘り出す道具がないために、みん



な手先をけがをしていた。

やがて夜になると、遺体が次々と学校へ運ばれてきた。遺体というものに慣れてきて、毛布をひろげ、お棺に移す作業も要領がわかってきたが、焼死体だけは、気絶しそうな程のつらい作業だった。まだ肉片が骨についており、そのすさまじいにおいと闘いながら、バラバラになっている骨を、人の形に整えながらお棺に移す作業は、男の自分さえ、何度もあげそうになってしまった。その時初めて、自衛隊の人達の大変さがわかったような気がする。

結局、校区内では20名あまりが亡くなられた。そのうち児童は2名。他は全て老人であった。みんな1階に寝ていたために、2階部分の落下による圧死である。そこに火災の発生である。

午前3時起床。小学校到着は午前4時頃。すぐにボンベで湯をわかす。午前5時すぎ頃になると千名近い避難者のうち数十人は起きてきて洗面を始める。そのためのお湯である。

午前9時まで朝食の手伝い。その後、家庭訪問と校区巡視に出かける。教え子達の把握と危険箇所を調べ、地図に書きこむ作業。更にいろんな人達の話し相手になり、情報を提供する仕事も加わる。話がなぜか弾む。

帰校して、今度は配給物資を軽トラックにのせて、地域へ配ってゆく。避難所である小学校まで来られない人達にチリ紙交換と同じ要領で配っていくのだが、作業はなかなかかどらない。

夕食の準備、給水、夜間警備、外部と避難者との取りつき、仮入学児童の把握と続き、午後11時頃帰宅する。この生活が3週間続いた。

3週間後、小学校が再開された。施設の半分が壊れたため、二部授業。午前と午後に分けて、低学年、高学年の授業を行う。約半分の児童しかいない再開である。全壊した家の子、家族を亡くした子、地震後の余震のたびにおびえる子など、心のケアを最優先とする授業でもある。

「地震で得たこと、失ったこと」というテーマで社会科の授業をしたところ、「人の親切のありがたさ」「水のありがたさ」などと、得たことの方が、失ったことがらよりも少し多いという結果になった。

天災でありながら、同時に天恵でもあったという結果である。21世紀が楽しみである。『患難知交』の世代である。

第1集「被災した私たちの記録」

手記3 災害派遣 S・M(男性) 28歳 陸上自衛官 兵庫県小野市

地震発生後から中部方面隊を主力とした戦後最大と言われる災害派遣活動が行われた。TVのブラウン管に映る被災地の状況を思い出しながら「果たして自分に何ができるのであろうか」と被災地に赴くトラックの中で私は自問自答していた。

私の所属する部隊の任務は、須磨区における人命救助であった。消防隊員や警察官の誘導により現場へ赴き、小隊編成による救助活動が始まったが、地震対策資材を装備していない為、人海戦術による作業であった。こうして、慣れない手つきで倒壊家屋から何名か救出したが、皆遺体での収容であり、残念だった。

捜索現場へ向かう途中、被災者の方々から「炊き出しは何処でやっているのか?」「ガスが漏れている様なので何とかして欲しい」「水は何処へ行けばもらえるのか?」と聞かれた。自衛隊の支援活動については、わかる範囲内で案内説明し、個人的な支援要求については人命救助が最優先である事を伝え、断った。

午後7時頃、作業中止となり、部隊は須磨警察署前で待機となった。

午後9時頃、仮眠先の神戸女子大へ向かった。仮眠所の体育館は部隊の隊員であふれ返っていた。「自衛隊さんへ」と、女子大生が握ってくれたおにぎりを食べたが、とてもおいしかった。

た。

この頃になると、他中隊の遺体発見の話が聞けるようになった。その中で特に印象に残っているのは、家族4人の遺体が発見された時の話である。

その家族は川の字で寝ていたらしく、子供が左に寝ていれば親が左側に、子供が右に寝ていれば親が右側にと、両親が子供をかばう様に死んでいたようだ。

親の遺体は瓦礫の粉塵に汚れて損傷もひどかったが、子供の遺体はきれいな状態で発見された様で、一歳と三歳の子を持つ親としては、そのような現場に当たらなくて良かったと思うと同時に、自分の身を犠牲にして子供を守る親の姿を思い浮かべて涙が出た。

その夜、体育館に寝袋をしいて就寝したが、まだ瓦礫の下で生き埋めになっている人の事を思うとなかなか寝つけなかった。

次の日は、長田・須磨区境界線での作業となり、遺体捜索にあたったが、現場はナパーム弾を投下された後の様で、火災も鎮火したとはいえ、非常に暑く、猛暑の中で作業をしている様であった。遺体も殆どが遺骨で発見された。こうして一日の作業を終え、翌日も同様の事をし、こうした日々が続き、23日の長田区の一斉捜索活動を境に、部隊主力を持って行う救助活動主体の災害派遣は終了した。

一斉捜索の時であるが、廃墟の中、スコップで掘っているうちに他の場所から4人分の遺骨が発見された。その中に、中学生の男の子がいたらしく、先生と同級生が花束を持ってお参りに来た。作業は一時中止となり、隊員が見守る中、線香をあげ、涙を流しながら拝んでいた。その姿に、隊員達も哀悼の意を表した。

こうして、死臭と粉塵にまみれた救助活動も終わり、須磨区を後にした。以後は、方面航空隊の「端末地輸送業務支援」に参加した。八尾基地でCH147ヘリに弁当をはじめとする生活必需品を人海戦術で積み込み、王子陸上競技場の臨時ヘリポートや、淡路島等へ空輸を支援する作業であるが、王子陸上競技場では、自衛官と共に懸命にヘリから物資を運び出すボランティアの姿が見られ、「俺も頑張らねば」と、励みになった。

こうして、端末地輸送業務支援を最後に、約2週間に及ぶ災害派遣活動を終えたのであるが、あの頃を振り返ると、最初、私は災害派遣は初めてで、一抹の不安はあったものの、何とか任務を遂行できた事で満足感に満たされた事を思い出す。

今回の災害派遣に参加出来た事を誇りに思うと共に、被災者の方々から送られた言葉を決して忘れはしない。「ありがとうございました」……。

\* 第2集「阪神大震災 - もう1年、まだ1年」

## 手記4

## おかえり

M・M(男性) 17歳 高校三年生 神戸市須磨区

僕はあの日、あの人達のあの顔を一生忘れないだろう。あの日とは地震後、僕の家族がもう明日から家に帰ると避難所で同じ部屋だった人達に伝えた日だった。同じ部屋で生活を共にした人は30人ぐらいいたのだが、みんながみんな、「よかったね」と笑顔で声をかけてくれた。

本当はうらやましいのにそれを見せずに笑っている、僕にはその様子が痛いほど感じ取れた。その人達に見送られて、うれしい気持ちと、うしろめたい気持ちが混ざってなんともいえない熱い思いが込み上げてきて、避難所を後にしたあの日が今でも昨日のこのように思われる。

地震が起きた1月17日の朝、僕はちょうど修学旅行中で、信州にいた。なにげなくテレビをつけてみると、目の前には長田の街が黒い煙を出して燃えていたり、あの阪神高速道路が横倒しになっていたり、信じられない光景が次々と転がり込んできた。はっと家族のことが気になり、急いで宿舍の電話コーナーへ行くと、長蛇の列ができていた。みんな不安な様子を隠し切れず、順番待ちの間、足踏みをしたりして、そわそわしていた。スキー実習の時以外はずっと部屋にこもってテレビを見ていたが、その間にも死者の数は増えていき、何度家に連絡しても電話のつながらない僕はどんどん不安になっていった。



幸い、3日目の朝、須磨警察署の方がわざわざ宿舎に僕の家族が北須磨小学校に避難していると電話で伝えてくれた。早速、僕はその北須磨小学校へ電話をかけた。父さん、母さん、姉ちゃん、家族全員と一言ずつ話をすると、安心して全身の力がずっと抜けていった。

次の日の晩、声だけじゃなく顔を見たいという思いを胸に、僕を乗せたバスは神戸へ向かった。翌日の昼すぎ、学校に着くと、父が迎えに来てくれていたので、すぐに車に乗って家へ向かった。途中、痛々しい光景が次から次へと目に飛び込んできた。

家について荷物を整理すると、すぐに着替えを持って避難所へ向かった。隣りの家が今にも倒れてきそうだったからだ。北須磨小学校に着くと、5年2組の教室へ連れていかれた。

それから2週間ほどの避難所生活が始まった。僕が北須磨小学校で生活し始めたのは地震から4日目だったのだが、もうすでに同じ部屋の人達は疲労しきった様子だった。でも、みんな疲れた体と心にムチを打って、一生懸命、今、自分に出来ることをやっていた。一見いけず(意地悪) そうなおばさんは、実はとてもやさしい人で、自分の持っている数少ない材料を惜しみなく使って、みんなの冷えた体を温めてくれるおいしいスープを配ってくれた。がらの悪そうな男の人も、自分の部屋の一人一人にちゃんと配給があたるようにと、重たいダンボールを腕をまくりあげてかつぎあげ運んでくれた。冷たい鉄筋校舎の中では、そうした人達のやさしさが一層温かく感じられた。

最初、避難所での食事は少なく、毛布も少なく、4人で一枚とかだったけど、やがて数も増えてきて復興の兆しも見えてくるようになった。僕自身、何か出来るんじゃないかと考え、北須磨小学校の動物広場の動物たちにえさを与えることにした。大根や人参をきざんで兎や鶏にやろうとした時、僕の危なっかしい包丁の手つきが気になったのか、眼鏡をかけた小さい女の子がやってきて、「私がこれ切るから、お兄ちゃんはえさあげて」と、僕の包丁を取って、手慣れた手つきできざんでいった。僕はその子のきざんだ野菜の入ったバケツを持って兎小屋に入り、えさをばらまいたのだが、数十匹いる兎の中には、やっぱり体が弱くて食べる物の無かった間に、死んでしまったのもいた。その子は何も言わず、ただ悲しそうな目で、その兎をじっと見つめていた。その光景は今でも僕の心にはっきりと残っている。

その他、同じ年頃の子と大きい荷物を運んだり、小さい子と一緒に便所そうじをしたり、時には部屋の代表として、各部屋の代表者の会合に出たりと、避難所にいた2週間、僕は人間らしく、人と手と手を取りあって暮らしていったと思う。

テレビ・新聞では被害総額がいくらだ、などといっているが、僕はお金では得られない何か言葉に出来ない大切なものを手にしたように思う。

今、僕の家のみわりにはほとんど家がない。僕の家はなんとか大丈夫だったけど、修理費はかなりのかかるようだ。生活は苦しいはずなのに、父も母もそんな様子は少しも見せないで、せっせと働いてくれている。

そんな親を元気づけられるように、また、何年か経ち、僕の家の人達が戻ってきた時に、笑顔で「おかえり」と言えるように、今から明るく前向きに生きたいと思う。

\* 第2集「阪神大震災 - もう1年、まだ1年」

## 手記5

## 娘

M・K(女性) 40歳 主婦 神戸市兵庫区

私は「こども病院」の周産期センターに入院した翌日に、この地震に遭遇した。

周産期センターは、できて間もない建物だがかなり揺れを感じた。自宅に6時過ぎに電話をかけた。主人の話では、タンスが倒れ、衣裳箱や蛍光灯まで飛んだらしい。もし入院せずに自宅にいたらまさにそのタンスの下敷きになっていた。腎臓に障害が出たので早めに入院したのだが、おかげで私は病院、息子は叔母の家にて事なきを得た。

大型TVが主人の足元にひっくり返っていたという。身体をよけてまわりに落ちたのは幸運だった。とりあえず命に別状がなかったと聞き安心した。

病院は電気がすぐに自家発電となり暖房が使えず、寒くなった。最新式のトイレも自動検尿装置が使えず、水も汲み置きのを節約しながら使うことになった。前日シャワーをしておいてほんとうによかった。食事も自動で運べる運搬車が使えず調理の人は大変苦心されている。

そのうち窓からの景色が変わってきた。山の向う側がかなり広い範囲に明るいのだ。というよりも赤い。煙も出ていてどうやら火事らしい。方角は長田だ。この火は延々と燃え続けた。また、第二神明道路が通行止めになったようで、車がなくなり、その下の道路に車が数珠つなぎになりだした。夕方くらいから自衛隊らしい車も少しずつ増えてきた。ヘリコプターもかなりの数が飛んでいた。ただTVで放送される犠牲者の数がどんどん増えていくのに驚くばかりだった。

さて、お産の方は、自家発電の容量に限度があり、新しく生まれてくる赤ちゃんに対応する電力量がないとのことで別の病院へ転院することになった。普段なら3、40分で行けるはずの明石市民病院へ救急車で2時間近くかかって移動した。その途中でも民家が倒壊していたり、道路が陥没していたり、うねっていたりで、どっしりした救急車でさえ、とても乗りごちが悪かった。

病院に着いたあとも、絶えず余震があり、不安でしやうがなかった。この病院もしばらくは自家発電だったらしいが電気に不自由はなかった。優先的に回されてくる水を大事に少しずつ利用した。入浴も一週間の間で一度だけシャワーのチャンスに恵まれた。節約できるところはできるだけ節約したという感じで、食器は発泡スチロール製、デザートなどは既製のものがほとんどだった。朝、新聞を買うために売店に行くと開店と同時に病院以外の所からの人達が一斉に食べ物などを買っていくらしく、品物がほとんど何も残っていない状態が3日間続いた。

大変困ったのは電話だ。病院内の台数が少ないうえにつながりにくい。そのうえついつい長電話になってしまうので、なかなか大変だった。交通手段にもまいった。大阪に避難させた4歳の息子を主人が迎えてここ明石に来るのに船やバスを乗り継いで3時間以上かかったそう。ほんの少し話をしただけで、またすぐに帰路に着かなければならない。一日仕事である。

息子はかなりハイテンションになっており、とても元気でお兄ちゃんでお利口さんを装っていた。が、4月から行き出した保育園でちょっとおかしかった。一つ目小僧の絵を描いたり、2階の階段のところにオバケがいると怖がったり、しばらく怯えた状態が続いた。

主人も大阪の会社には通えないだろうと会社側の配慮で一カ月半休むことになった。ライフラインも水道が2月末、ガスが3月初めに復旧し、やっと自宅に戻ることができた。主人はJRが全通した4月から自宅通勤が再開できた。

それまでの間、近くの親類や友人宅で大変お世話になった。人の温かさをこんなに痛切に感じたのは初めてである。有難いことだ。多くの人々に感謝している。大地震は二度といやだが、人とのふれあいが深まって良かったと思う。

そして、一番感謝したいのはお腹にいた娘。この子のおかげで前日に入院し、私と息子の命が助かった。

娘はコルネリア・デ・ランゲ症候群という障害をもって生まれてきた。2歳になる現在も首はすわらず、耳は聞こえず、目も見えない。ほとんど食べることもできず、1回200ccのミルクを一日3、4回飲むことで命をつないでいる。

だが、私たちに生きる価値を教えてくれているように、6.1kgの小さな体で、一生懸命生きている娘がいとおしくてしかたがない。

「本当に、生まれてきてくれてありがとう。これからも、ゆっくり、ゆっくり、大きくなるうね」、そう言って抱きしめてやりたい。

発達段階	高等学校	教科等	特別活動				
タイトル	被災者等の手記に学ぶ(B) ボランティア						
実施日(月日)							
所要時間	事前準備	5分	10分	15分	10分	10分	HR後
展開		導入	全体活動	各自で手記を読む	考えをまとめる	結び	
達成すべき目標	手記集の準備 Webサイト「阪神大震災を記録しつづけて」第2集～第5集から、ボランティア活動をテーマにした手記を5編程度を選び、印刷。(別紙B-1) <a href="http://www.npo.co.jp/hanshin/">http://www.npo.co.jp/hanshin/</a>	本時の目標を理解する	災害発生後の自分がおかれる立場をシミュレートする	自分の立場に沿って手記を読み、自分に何ができるかを考える	マイ ベスト ボランティアをまとめる	今後の課題を理解する	・ワークシートの回収と点検 生徒の記入したワークシートを回収し、点検。よく書けているところには、下線を引いたり、コメントを加えたりする。
生成物	配付ワークシートの準備 地震発生時、自分がどのような立場で災害に直面するかを考え、自分にできるボランティアを記入するワークシート。(別紙B-2)	与えられた条件に沿って自分にあったボランティアを追求していく意欲	ワークシートの空欄補充	・自分がおかれている立場に照らして手記を読み進める力 ・ワークシートへのメモ	・自分たちが「ボランティアの主役」という自覚 ・マイ ベスト ボランティア	発表	・マイ ベスト ボランティアの掲示 8つの立場ごとに整理し、教室の後ろに掲示。全員で目を通し、「キック・オフ宣言」に向けて、クラス、グループ、個人として何ができるかを考える。
学習単位		全体	全体	個人	個人	全体	・マイ ベスト ボランティア「キック・オフ宣言」 学級・グループまたは個人でボランティア活動をスタートする日を約3か月後に設定する。
進め方	ワークシート内容の板書 始業時までに、ワークシートの内容(大規模災害発生とABCの図)を板書、またはプレゼンソフト等を用意する。	・ワークシートを配付する。 ・ABCの各記入欄が空白の状態、ワークシート下部のABC欄に「思いつきで」それぞれ または を記入する。 ・自由に年齢(16歳～)を記入する。 ・その年齢に応じたプロフィール(職業や特技など)を記入する。	・大規模災害が発生した時、それぞれがどのような立場におかれるかを考えながら、空欄に条件を埋めていく。 A 被災地に在住か否か B ケガの状態・被災地との距離 C 入院の長短・身内の犠牲者の有無・被災地に行くか行かないか(行けないか) ・導入で書き込んだ、年齢、プロフィールによって、自分の立場を確認する。	・自分がおかれている立場に照らして手記を読み進める。 ・手記をヒントに自分にできるボランティアを考え、ワークシートのメモ欄の記入する。 ・手記からボランティア活動によって得た感動や喜びを抜き出し、メモ欄に記入する。	・どのような立場に立っても、自分にできるボランティアのあることを気付く。 ・自分たちが「ボランティアの主役」になっていくという自覚をもつ。 ・具体的なボランティアの内容を想像しながら、どのようなボランティアに取り組みたいかを記入する。	・数名が、それぞれのマイ ベスト ボランティアを発表する。 今後の課題 マイ ベスト ボランティア「キック・オフ宣言」について、理解する。	
ツール(準備物)		ワークシート ワークシートの板書(プレゼンソフト)	ワークシート	手記集	ワークシート		
場所	教室						

「被災者等の手記に学ぶ ( B ) ボランティア」

出典：阪神大震災を記録し続ける会HP <http://www.npo.co.jp/hanshin/>

\* 教材化に当たって、原文の一部を省略しています。

手記 6 ボランティア・マニュアル Y・R (男性) 28歳 美術館職員 静岡市

これは、神戸市中央区にある旧下山手小学校避難所における 2 月 4 日現在 (地震後 19 日目) のボランティア用運営マニュアルである。

この下山手小学校は、平成 6 年 3 月に廃校となったため、教師はいない。よって、避難所運営は、住民とボランティアが行っている。また、授業再開の心配がないので、長期の避難所生活に耐えうる運営が必要である。住民は、21 の教室に約 330 人、グラウンドのテント等に約 20 人、ボランティア 3 ~ 6 人が一緒に生活していて、他に、区役所職員が半日交替で 1、2 名配備され、和歌山医大のチームが常時診療を行っている。ライフラインは電気、電話が復旧していたが、水道、ガスはまだである。

共同作業については、住民の中から、食糧、物資、夜警、清掃、ごみの責任者及び副責任者を各 1 名選出し、さらに総責任者が決定していた。トイレについては、部屋当番制になっていて、1 日交替で、給水、紙の補充、清掃、監視を行っている。

これらの状況から、ボランティア運営マニュアルの柱として、以下の 4 点を設定した。

- 1、住民が自立しかけているので、あくまでその手伝いをする事。
- 2、救援物資は住民のものなので、要求があれば、必ず渡す事。
- 3、役に立ちそうなアイデアを実行し、生活環境を日々改善すること。
- 4、住民には笑顔で接し、明るい雰囲気をつくること。

また、個々のケースについてのボランティアの対応は、以下のとおりである。

- 1、電話の呼び出し  
五十音順名簿で確認後、電話を切り、同室の人にメモを渡して、別の電話からかけ直してもらう。これは、本線を受け専用にし、必要な情報が入りやすくするためである。
- 2、人探し、安否確認  
本部横の壁に貼ってある部屋別名簿で捜してもらう。なければ本部内の五十音順名簿で調べ、それでもなければ付近の避難所地図を渡す。
- 3、新規入居者  
五十音順名簿と部屋別名簿に住所、氏名を記入してもらい、毛布 3 枚渡して図書室 (2 月 4 日現在) に案内する。ボランティアも同様である。
- 4、食事の配給  
朝 7 時半、昼 12 時、夕 5 時半を目安に配給する。  
在庫数、賞味期限、栄養バランス等を考慮し、食糧係と相談してメニューを決める。  
メニューを黒板に書く。食糧係とボランティアが配布にあたる。  
部屋単位で取りにきてもらえるよう、放送する。  
部屋名と人数を記録し、配給する。
- 5、給水方法 (1 日 1 トン ~ 2 トン)  
給水車を誘導する。1 台につき 1 トンなので、ポリタンク 50 個を用意する。  
水道局等の人とともに給水を手伝う。  
1 日おきにポリタンクの色 (黒とグレー) を替えて区別する。
- 6、物資の保管と渡し方  
菓子及び日用品は、一種類につき段ボール二箱分を階段に並べ、少しずつ自由に取ってもらう。不足分は倉庫から補充する。  
衣類は倉庫に保管し、量が増えてから、物資係と相談して、部屋ごとに分ける。

- 7、炊き出し  
材料がそろったら、放送で料理をしてくれる方を集める。  
放送例、明るく「料理の好きな方、味にうるさい方、炊き出し場に集まってください」  
作りはじめたら、下がって見守る。
- 8、薪、廃材の確保  
2、3日に1回、周辺のマンションの大家の許可を取って、もらいに行く。
- 9、水の使い方  
給水車の水は沸かして飲む。生活用。池の水はトイレの流し、手洗い用。  
ミネラルウォーターでは薬を飲む。
- 10、物資の搬入  
他の作業中であっても応援に行く。種類と数をチェックし、倉庫へ運ぶ。納品書は区役所職員に渡す。  
ただし、住民とトラブルにならないようにすることが大切なので、このマニュアルにかかわらず臨機応変に対応すること。

第2集「阪神大震災 - もう1年、まだ1年」

## 手記7 COME BACK KOBE

1・1(女性)21歳 大学生 仙台市

私は神戸っ子だ。あの当時、私は高校三年生。地震があったのはセンター試験直後だ。家のある神戸市西区は比較的被害の少ない地域と言われるが、十日程水が出なかっただけでもかなりの不便さを感じた。だが学校のある長田の惨状は深刻だった。

地下鉄を降りると、もうまるで別世界。避難者の住む学校まで歩いて調査書を取りに行くときに見た焼けた家々。黄色い空気。人は大勢いるのに声のない静けさ。取材のヘリコプターとその爆音。救急車・消防車のサイレン。線路の上を歩く人々。

学校で友人たちは淡々と話す。「風呂に入りたい」「避難所は勉強がしにくい」「家が焼けた」「友達が死んだ」「命があるのが不思議だ」。

これらは震災直後の出来事だから、世間は過去のものとしているだろう。しかし、震災から3年近くたった今なお、3万人の方が仮設住宅で暮しておられることを知っている人は、この日本に一体どれくらいいるだろうか。

「震災はまだ終わっていない」週末ボランティアに参加して仮設訪問にうかがうたびに、その思いが頭を巡る。

ボランティアに参加してから一年半。神戸を遠く離れて仙台の大学に通う私は、実家に帰れるときしか仮設訪問に行けない。だがボランティアの仲間はいつも温かく迎えてくれるし、仮設の方々もいろいろな話を聞かせてくださる。指折り数えるぐらいの回数しか参加出来ないが「まだ終らぬ震災」を垣間見ることはできる。

震災後、何度も応募してやっと当たった仮設住宅に入居する際、長年付合ってきた近所の人と離れ離れになる場合が多い。ほんの十数秒で、ある日突然家も、思い出の品々も、平凡な日常生活も、大切な人をも失った人々は、長屋のような仮設住宅に無一文の状態で放り込まれたのだ。夏は40度を超え、冬はむき出しの水道管が破裂する寒さの中、病気に倒れる人、悪化する人、更には孤独死する人が後を絶たない。

平成9年の9月7日、神戸市ポートアイランドの仮設住宅で、病身の女性が衰弱死しているのが発見された。なんと料金滞納を理由に水道を止められていたのだ。

仮設に住む人には、一人暮らしのお年寄りも多い。学生で一人暮らしをする私でも風邪をひいた時などは辛いのに、疲れやすいお年寄りはどんなに大変だろう。二人暮らしでも、寝たきりの親御さんの世話をしてる場合などもある。自力で再建する力のある人々が仮設を出ていった今、仮設の集合住宅の明りがつくのはせいぜい半分。お年寄りや障害者など、社会的弱者がほとんど



どである。いずれは仮設住宅を出なければならぬ人達の不安や焦り、寂しさは募る一方だ。

こんな実情を知る人々は、一体どれくらいいるのだろうか。特に、私の住む仙台などの遠隔地では、阪神大震災関連の情報は全くないに等しい。私は年に数回は神戸に帰るが、そのたびに情報量の違いを身に沁みて感じる。鉄道も早くから復旧し、高速道路も復旧し、神戸港のコンテナ・ヤードも元の数だけ動きだし、「百万ドルの夜景」とうたわれた町の明りも少しずつ元通りになっていく。しかし忘れないでほしい。町が元気になるほど、焦りと不安で一杯になる人々が、まだ大勢おられることを。

確かに、事実距離的にも仙台、神戸間は遠いが、心の距離も遠いように私は思う。しかし、「週ボラ」には、北海道から沖縄まで、日本全国からの参加者がいる。私の仙台の友人が神戸に遊びに来たとき、仮設住宅を目にしてショックを受け、後でこう言った。「いつ来れるか分からないけど、必ずまた来る。そのときは絶対に仮設訪問に行かせて」と。現実を知ると、やめられなくなる。

一時期、「私はボランティアをしている」と人に言えなかった時期があった。自分自身が何もしていないように思われたのだ。たまに神戸に帰って来ては仮設に行き話を聞く。ボランティア面しているだけで、実際には何も問題を解決していないじゃないか。

すると、大先輩がこう言われた。「役に立とうと思っちゃいけない」。

親友がこう言った。「週ボラは鏡。その人自身の心に耳を傾けられるようにする鏡なんだ」。それから、私自身がフワッと軽くなれた。構えちゃいけない。無理する必要など全然ないのだ。

最後の一人が「自分はよくあんな仮設で頑張ったな」と、笑って言える日がきて欲しい。そして私は、仕事がなくなるまで週末ボランティアに参加し続けたい。

第4集「今、まだ、やっと・・・ 阪神大震災それぞれの4年目」

## 手記8 トイレ糞闘記

T・Y (男性) 53歳 会社役員 大阪市

わが「日本トイレ協会」と「神戸国際トイレピアの会」の長老のO先生も灘区田中町の自宅が全壊し、ご自身も生き埋めとなられ数分後に救助された。私は既に避難先のご息宅へは見舞いに行っていたのだが、所属している「ASANUMA快適トイレ研究会」の相談役でもあった関係で、2月6日に久しぶりに先生の慰労も兼ねた研修会を大阪で開いた。

そんな矢先に「トイレ調査隊」の話が東京方面から出ていると資料が配布された。すでに、地震から3週間近くたっており、実行が2月18日からという1カ月も経過する。趣旨は理解出来るが、被災者にとっては、心情的にも「今さら」という感が否めない。まして、江戸っ子弁で調査などと第三者的に喋られると、場合によっては被災者の心を逆撫でしかねない。東京へはその旨説明し、現状を改善してあげることこそ大切ではと提案した。

被災地のトイレは汚れている。掃除する気力がなえている。公衆トイレはテンコ盛り状態だ。参加者には、寝袋とテントとリュック、それに清掃用具の雑巾、ナイロン手袋、バケツ、柄つきタワシ、洗剤、洗浄剤、消臭剤、ウエットティッシュ、ゴミ袋、長靴などを持参することをお願いした。調査という目的も考慮しながら、今回は関西のやり方でやるということになる。

2月18日(土) 第一陣が阪神青木駅に集合。全国から51名が集まる。職業も年齢もまちまちだ。一部を除き皆初対面。調査の仕方、注意事項などの説明をし、各班に分かれ自転車で各々の担当する避難場所の地図と清掃道具を積んで避難場所へ向かう。最初に行ったのは小学校内の避難所である。

思った通り、調査には気持ち良く対応してもらえない。仕方なく調査項目を適当に飛ばしながら相手の表情をうかがう。

「では仮設トイレを見せて頂けませんか」。現地に案内され、早速、トイレの状況をチェック、散らばったトイレトーパーを取り除き、汚れている床を清掃し、飛び散った汚物を拭き、最後に消臭スプレーを撒き、1箇所ごとに丁寧に仕上げる。「ありがとうございました」。やっとお互いの心がふれあう。

次は、中野南公園の仮設トイレ 10 基だ。ともかく汚れている、さっきの比ではない。一瞬ためらうが近くに水道があることがわかり、バケツに水を入れ本腰を入れる。便器にこびりつき固まっている便を何回も何回もこすって除去する。便器のツボにも手を入れ水でキレイに洗う。側壁やドアについての汚物もキレイに洗うのに 60 分強かった。

近くで工事をしている人たちが「使っていいですか」と遠慮がちにたずねる。一同笑顔で「どうぞお使いください」と答える。そして、「キレイで嬉しいワ。ご苦労さんです」と言って立ち去られた。みんなニコニコ、集合場所へ向かう自転車のペダルも軽い。

午後 4 時からの全員の報告の中にも、「ウンチとより格闘した人ほど、顔が輝いていた」とあった。「明日も頑張るゾ」。翌日も同じような体験をする。

2 月 25 日、第二陣がいよいよ被害の大きかった兵庫、長田区へ向かった。3 箇所の避難所を調査した後、長田区の尻池公園の公衆トイレを掃除した。

使用禁止の扉を開けるや、大便器が隠れてしまうほどのテンコ盛りの状態で床もウンチでいっぱい。小便用のステップにも、ウンチの山。

さすがのメンバーも一瞬ためらい、言葉が出ない。誰もやろうとしない。しばらく沈黙が続く。水道の蛇口を捻るが水が出ない。……「水がないし」、「これは手に負えないワ」と異口同音に言う。

ところが、被災者の女性が、近くに停車していた自衛隊の給水車と何やら交渉し、「水がもらえるワ」と帰ってくる。この辺りの人家の水道が復旧しはじめたので、今日は誰も水をもらいに来ていないらしい。そこで、快く水をくださることになったのだ。

「よしっ、やろう」とマスクとナイロン手袋を付ける。ナイロン袋を二重にし十能でウンチをすくう。3 回程すくうと耐えられなくなり交代した。集めたウンチがナイロン袋に 3 個。

その後、洗剤をかけ柄付タワシでこすり、自衛隊からいただいた貴重な水をバケツに汲むこと十数回。排水も何とかうまくいき、最後はウェットティッシュで便器を拭き上げ、消臭スプレーを撒布し完了である。90 分近くかけてピカピカになった。

しばらくすると、通行する人が笑顔で入って行く。今回も、みんなの顔が輝いている。ありがとう。

3 月 4、5 日と、第三陣が千葉などからやって来る。地震発生から 50 日もたっているのに、物もあり、水もほとんど出ている。今さら調査でもない、今回は特に、公衆トイレと JR 鷹取駅前の仮設トイレを重点的に清掃した。

次に、公園でテントを張っている避難所へ行った。お世話しておられる女性に会い、今まで通り話をしかかると、「今頃何しに来たの。調査などと言って何人も何人も来るけど、何かやってくれるの」と、ボランティアに少しアレルギー気味である。

仮設トイレを 1 箇所ずつ点検していると、ドアのちょうつがいの金具が、途中で折れているのがあった。使用中に開けられる恐れもあり、特に女性の場合使用を躊躇すると推測された。「よしっ、これを直そう」と決めた。素人ながら色々考えた末、ドアの下部に穴を開け針金を通しフックを作り、もう一方の部分にひっかけて外部から開けられないようにした。ペンチがないので手で何回も曲げては針金を切り、何重にも針金を重ね強くしてドアの修理を完了した。念のため、同じ班の女子大生に中に入れてもらいテストする。大丈夫とのことで、さっきのおばさんと呼び、修理した内容を報告する。

ひと仕事終わり 近くの道路で持参のパンとおにぎりで昼食をと腰を下ろしていると、「さっきはおおきに。これ食べていき」と 3 人分の食事(御飯と野菜汁とお茶)を運んで来られる。思わず「ありがとうございます、いただきます」と笑顔満面の面々。

その後、水が出てトイレの問題は解決してきたので、トイレ調査隊の仕事は終了した。

震災以来、ずっと自分を追い込んでいるような気がする。今でも誰一人助けられなかったことを悔いているのだろうか。自分ではおろせない荷物を抱えたまま、震災2年目の正月を迎えた。ナホトカ号が日本海に沈んだのはその翌日だった。

海岸を目指すおびただしい油を前にオイルフェンスも中和剤もなすすべがなく、5日後、重油の塊が福井県の海岸に漂着した。必死で油をすくう地元の漁民たちがテレビに映し出された瞬間、私の中で2年間くすぶっていた気持ちに突然火がついた。何があっても行かなければならないという衝動に駆り立てられた。

震災の経験が生きていたのだろう。ボランティアの立ち上がりは早く、漂着した翌日には7名が作業を開始した。きっとずっと前からこんな機会を探していたのだと思う。新聞に載った直行バス運行の記事に私は飛びついた。すぐに問い合わせたが希望者が多く、すでに定員オーバーだった。私は焦った。この機会を逃すとまた後悔し続けることになる。

思いきってバスを運行している日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)に電話をかけ状況を聞いてみると、ちょうど明日の朝刊に募集の記事を載せる予定だという。これが福井に行ける最後のチャンスだと思った。私はその担当者に思いを伝え、無理を言って席を確保していただいた。

さっそく合羽など準備物を揃えるため近くのコープ(生協)に出かけると、他のサイズは何足もあるのに25~27cmの長靴だけが売り切れていた。単なる偶然かもしれないが、私には同志が神戸に大勢いるように感じられて心強かった。それが最初に感じた神戸の善意だった。

そして当日、満員のバス3台が新大阪駅から現地に向けて出発した。隣り合わせた人も神戸からだった。車内で現地の状況や手順について説明を受け、心の準備はできていたつもりだったが、ドロドロに固まった海と雪混じりの突風そして鼻をつく異臭に私は一瞬たじろいだ。

しかし、私たちの目的は明快だった。ただ目の前にある澱んだ塊を取り除けばいい。役に立るという確信もなく、身一つで駆けつけた震災のボランティアに私は改めて敬服した。

ゴツゴツした岩が1kmほど続く海岸線に300人はいたのだろうか。そこには2年前に神戸で見たものとそっくりの心象風景があった。張り詰めた空気があたり一面に漂い、まるで訓練された師団のように整然と作業をこなしている。そこには前向きで美しい人間の姿があった。バケツがいっぱいになると善意の手がこちらに伸びてくる。手から手へ、見知らぬ者同士が声をかけあいながらみるみるうちにバケツは遠ざかる。

風雪も悪臭も汚れもいとわない能動的な集団のエネルギーを感じた。瓦を無心に剥がしたあの日と重なり、神戸に助けにきてくれた人たちの気持ちがわかったような気がした。心地よい疲労感と満足感が私への代償となって帰路は深い眠りに誘われた。

帰ってすぐ、私はNVNADのメンバーに名を連ねた。後日届いた会報は、意義ある活動の報告とともに神戸からの参加が非常に多かったことを伝えていた。

「震災の時お世話になったお礼に」「震災の時には何もできなかったので」という動機が圧倒的で、NVNADを通じての参加者は延べ2132名に達した。

夏になって美浜町長からお礼状をいただいた時、この2年間の自分への負荷が少し軽減されたような気がした。神戸はまだまだ復興途上である。きれいになった町並みに覆われた傷はなお深い。しかし灰色に染まった話ばかりでもない。あの時小さく無力だった人間は、今は明るく力強い。少なくとも私はそう思いたい。そして震災を機に広がり始めたボランティアの意義を真正面から見据えていきたいと思う。震災が残した唯一の美德なのだから。



手記10 ひなげしの花 T・K(男性)58歳 「週末ボランティア」代表 須磨区

1998年の1月24日はその冬でも一番寒い日でした。被災地に3年間、毎週土曜日の仮設住宅訪問ボランティアを行って来た私たちは、その日も、数えて92歳となったばかりのSさんとともに41名による訪問活動を終えました。

次の月曜日に職場へ、いきなりSさんのお嬢さんから電話がかかりました。「お仕事中、お知らせしてよいかどうか迷いましたが、父が昨日の朝ふとんの中で意識不明で見つかり病院へ運ばれ手を尽くしましたが、脳をやられており時間の問題だと宣告されました。まだ亡くなっていないのにこう言うのはおかしいですが、父はしあわせものでした。毎週土曜日にボランティアへ行くために、数日前からそわそわし始め、土曜日は朝早くからうろろうして手が付かず、時間になるといそいそと出かけていました。みなさんに相手になって頂くのが嬉しかったのでしょう。軍人あがりの父は、ガンコ厳格一辺倒で、家族にも笑顔一つ見せない性格でした。それがボランティアへ行き始めてから、見る見る柔らかくなってゆくのが判りました。晩年になって、やさしさやうれしさを経験させてくれたボランティアのみなさんに、父はしあわせでしたと感謝を申し上げたくて…」と静かなお言葉でした。

Sさんが私達ボランティアの集合地点に初めて現れたのは、震災の年の秋のことです。「わたしでも参加してよろしいですか？」そう言いながら少し腰の曲がった細身のSさんは熱心に、仮設の方に、自分が大病から健康を取り戻した「玄米食」の紹介をして、少しでも健康に役立てて頂けたらと考えて、とその抱負を述べられました。

「お話を聞くだけでよいのです。何か自分に出来ることがあるという考えは、どうぞ捨てて下さい」。そう言ってレクチャーで牽制するこのボランティア集団に、Sさんはその後、ほとんど「皆勤」の状態に参加をし続けてくれたのです。

お年を何うとあと6ヵ月で満90歳になると聞いて、ひそかにメモを控えておき、96年の3月14日、土曜日の集合レクチャーのときに「Sさん90歳のお誕生日おめでとう！」と、いきなり花束の贈呈をしました。そのときのクチャクチャになったSさんの顔は、揺れる優しいひなげしの花の色とともに、一生わたしの記憶に残るものでした。

数々のエピソードや話題を残して、2年半のボランティア活動を終えられたSさんのお通夜には、急にもかかわらず20数名のボランティア達が集まり、わんわん泣いて送りました。翌日の葬儀は新聞でも取り上げられ、「92歳のボランティア逝く」と報道されました。祭壇の写真は、「家中探したが笑っている写真はこれしかなかった」と家族の方が言われていた、ボランティアの訪問先で写したスナップでした。

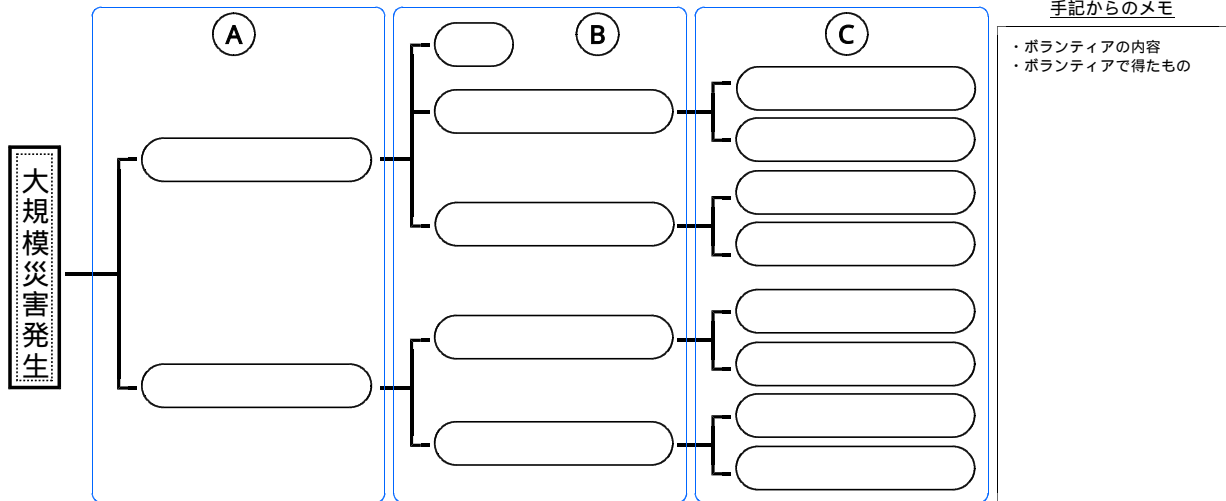
ボランティアを巡る環境がきびしくなり、事情を知らない外部の人達からの「もう立ち直っているはずだ」「甘やかしの助長だ」との心ない非難にもかかわらず、私達は被災者の元へと毎週通い続けています。それは、あのSさんが身をもって教えてくれた次の発見に由来しているのです。

「他人と対等につき合うこと」の願望、それは実はボランティア自身の願望であり、実は現代社会が失おうとしている大切なものへの模索であり、まして突然の災禍にいまだ戸惑いを続けている多くのお年寄りたちが、見ず知らずの私達の訪問の中にそれを見出してくれているそのことが、毎週毎週の訪問活動を新鮮なものにしてくれているのだという、その事実の発見なのです。

バリバリの軍人あがりのSさんは、お嬢さんが語られていたように、敗戦後の50年の生活をきびしく、まるで世に隠れるかのようにして生きてきました。そして最後に、その50年の全てをかけて、このメッセージを私達に託してたのではないかと……。

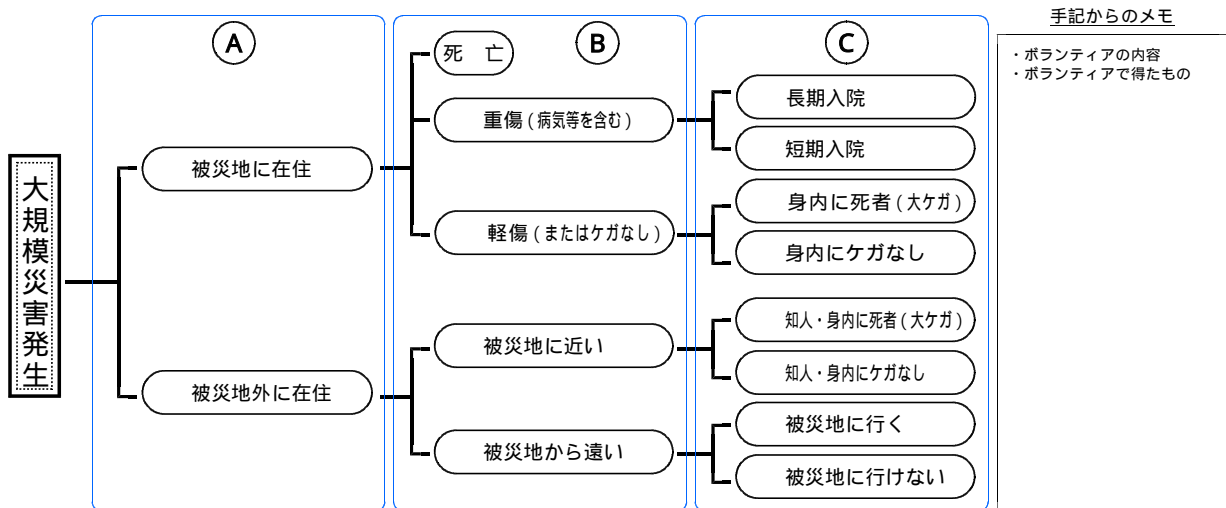
さようならSさん。一年後のわたしたちは、今まだこのように……仮設住宅の訪問を続けていますよ。

被災者等の手記に学ぶ命と心 (B)「ボランティア」を考える



A	B	C	歳	プロフィール	組	番	氏名
マイ・ベスト・ボランティア							
-----							
-----							
-----							

被災者等の手記に学ぶ命と心 (B)「ボランティア」を考える (条件の例)



A	B	C	歳	プロフィール	組	番	氏名
マイ・ベスト・ボランティア							
-----							
-----							
-----							

発達段階	高等学校	教科等	特別活動
タイトル	災害の歴史から人と人とのつながりの大切さを学ぼう - 人権の尊重の大切さ -		
実施日(月日)			
所要時間	1時間(本時)	3時間	
展開	コーディネーターからの提起	グループ調査・発表、まとめ	
達成すべき目標	災害時における、人権尊重の大切さを知る	災害時における、人権尊重の大切さを知る	
生成物	人と人とのつながりの大切さの理解	・グループ発表による発表資料 ・災害時における人権尊重の大切さの理解	
学習単位	全体	グループ、全体	
進め方	<p>災害の歴史から人と人とのつながりの大切さを学ぶため、過去の災害の歴史を探り、どのような出来事があったのかを知る。</p> <p>コーディネーターから「防災とは何か」についての提起</p> <p>9月1日「防災の日」は、私たちに何を教えてくれているのか</p> <p>関東大震災で起こった事件</p> <p>災害の混乱時期に起こる流言飛語の怖さ</p> <p>社会的弱者に向けられるいわれのない人権侵害事例</p> <p>いわれのない流言飛語で亡くなった多くの在日韓国・朝鮮人と日本人</p> <p>災害時に人が人として大切にしなければいけないことは何なのか</p> <p>人と人とのつながり、人権尊重の意識がいかに大切なことか</p> <p>常日頃からの人のつながりの大切さ、防災の心得、準備を怠りなく(適宜、発問をまじえながら生徒の意識喚起に努める)</p>	<p>司会生徒による提起</p> <p>(1)グループ事前学習による災害の歴史調査(1h)</p> <p>(2)グループごとの災害の歴史を発表(1h)</p> <p>(3)災害時において何が必要なのか、何を大切にしなければいけないのかをグループごとに話し合い、各グループからの報告、各グループまとめ(コーディネーターによる)</p>	
ツール(準備物)	コーディネーター(1名・教員)、発表用機材(OHC、OHP、ビデオ)、放送機材等 講義のための資料		
場所	視聴覚教室	視聴覚教室	

発達段階	高等学校	教科等	特別活動
タイトル	災害の歴史から人と人とのつながりの大切さを学ぼう - 人権の尊重の大切さ - 【1 / 4】		
実施日(月日)			
所要時間	10分	35分	5分
展開	導入	展開	まとめ
達成すべき目標	災害の歴史から人と人とのつながりの大切さを学ぶため、過去の災害の歴史を探り、どのような出来事があったのかを知る	災害時における、人権尊重の大切さを知る	災害の歴史から、人が人を大切にすることはどういうことなのかを知る
生成物	過去の災害から、人と人とのつながりの確認	災害時における、人権尊重の大切さの理解	災害の歴史から、人が人を大切にすることの理解
学習単位	全体	全体・グループ発表	全体
進め方	<p>&lt;9月1日、防災の日とは&gt; 災害の歴史の中でどのような出来事があった日なのか。子どもたちに尋ねながら、以下のことをともに考えてみる。</p> <p>&lt;関東大震災&gt; その中で起こった出来事          災害時の混乱時期に起こった流言飛語の怖さ          社会的偏見、社会的弱者などに向けられるいわれのない人権侵害事例（いわれのない流言飛語により亡くなった多くの在日韓国・朝鮮人と日本人等）          なぜこんな痛ましい出来事が起こったのかをみんなで考える          二度とこんなことを起こさないため私たちが自覚しなければならないことは何なのか</p>	<p>各グループによる学習内容を発表(1グループ3分)          ・グループ学習内容を各グループごとに発表する。          (*各グループにそれぞれ過去の災害を割り当てることも可能)</p> <p>各グループの発表を受けて、各個人がどう感じたのかなど感想を出し合い、話し合う。          話し合いのポイント          災害時に人が人として大切にしなければならないことは何なのか          危機管理や防災の心構えなど、何がどう必要なのか</p>	<p>自助、共助、公助など、災害時に人が人として大切にしなければならないことは何なのかを考える。</p>
ツール(準備物)	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表用機材(OHC、OHP、ビデオ)、放送機材等</li> <li>講義のための資料(防災の日について)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表用機材(OHC、OHP、ビデオ)、放送機材等</li> <li>講義のための資料(関東大震災、阪神・淡路大震災などについてのグループ事前学習プリント5グループ分 (1グループ8人=40人÷5グループ))</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表用機材(OHC、OHP、ビデオ)、放送機材等</li> </ul>
場所	視聴覚教室		

発達段階	高等学校	教科等	特別活動	
タイトル	地震に関する学習を振り返り、防災のための教材をつくろう - 地域防災教室への参加にむけて -			
実施日(月日)				
所要時間	5分	15分	10分	15分
展開	導入	確認	話し合い	まとめ
達成すべき目標	地震について、自分がどれだけ知っているかを確認する	地震の種類と仕組みについて確認する	地域の小学生を対象として、地震のメカニズムや防災について、伝える方法や教材を考える	各グループのアイデアを確認する
生成物	自分が持っている、地震についての知識や認識の確認	日本列島で起こる地震の種類と仕組みの確認	地震のメカニズムや防災について、伝える方法や教材の工夫・発送・意欲	グループごとの教材等の作成計画案
学習単位	全体	個人・全体	グループ	全体
進め方	地震について、どのように説明するか互いに試みる。 (場合によっては、資料1により、簡単なテストを行うことも考えられる。)	・資料2を参考に地震のメカニズムを確認する。 地震はどうして起こるのか。 震源(地震の中心)はどの辺りか。 ・内陸型地震と海溝型地震について確認する。 ・地震の大きさをどのように測定し、表すのかを確認する。 マグニチュードと震度について	グループに分かれ、小学生を対象とした「地震のメカニズム」や「地震が起こったときの対応」「普段からの備え」などについて、伝える方法や教材について話し合う。  伝えようとするテーマを決定する。 *テーマ例 ・地震のメカニズム ・マグニチュードと震度 ・地震発生時の初期対応 ・非常持ち出し品 ・地震被害(火災・建物倒壊・液状化・地すべり・津波など) ・被災者の気持ち など  伝える方法や教材を決定し、今後の作業内容・分担を考える。 *教材例 ・防災クイズ ・防災かるた ・液状化実験 ・演劇 ・人形劇 ・紙芝居 ・読み聞かせ など	各グループの発表を聞き、参考となる内容は積極的に取り入れる。
ツール(準備物)	・資料1「地震について、どれくらい知っていますか？」	・資料2 ・気象庁 地震と火山 <a href="http://www.kishou.go.jp/know/whitep/2-1.html">http://www.kishou.go.jp/know/whitep/2-1.html</a> ・気象庁 気象、地震に関するよくある質問集 <a href="http://www.kishou.go.jp/know/faq/index.html">http://www.kishou.go.jp/know/faq/index.html</a> ・文部科学省 地震調査研究推進本部 地震発生のメカニズムを探る <a href="http://www.jishin.go.jp/main/eq_mech/index.htm">http://www.jishin.go.jp/main/eq_mech/index.htm</a> など	・防災もの知りノート(NHKボランティアネット) <a href="http://www.nhk.or.jp/nhkvnet/bousai/earth/index.html">http://www.nhk.or.jp/nhkvnet/bousai/earth/index.html</a> ・はれるんランド(気象庁) <a href="http://www.jma.go.jp/jma/kids/index.html">http://www.jma.go.jp/jma/kids/index.html</a> ・グラグラかるた(静岡県地震防災センター) <a href="http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/hondana/pdf/a19-1998/">http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/hondana/pdf/a19-1998/</a> ・地震防災クイズ(静岡県地震防災センター) <a href="http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/quiz/">http://www.e-quakes.pref.shizuoka.jp/quiz/</a> ・防災キッズミュージアム(人と防災未来館) <a href="http://www.dri.ne.jp/html/kids/index.html">http://www.dri.ne.jp/html/kids/index.html</a> ・防災教育チャレンジプラン <a href="http://www.bosai-study.net/top.html">http://www.bosai-study.net/top.html</a> など	
場所	教室またはコンピュータ室			

## 地震について、どれくらい知っていますか？

- 昔から恐れられているものの例えとして、次のように言われてきました。〔 〕には何が入りますか。  
〔 〕、雷、火事、〔 〕
- 地震の原因は、次のどれですか。  
なまが動くこと プレートの動き 月の引力
- 地震について述べた文です。正しいのはどれですか。  
地震は地球のあらゆる場所で等しく発生する。  
地震が起こると、必ず火災が発生する。  
地震は海溝やトラフなどプレートどうしが近づきあう境界付近で繰り返し発生する。
- 地震のエネルギーの大きさを表す尺度は何ですか。  
マグニチュード 震度 倒壊率
- マグニチュード 7 の地震が放出するエネルギーはマグニチュード 6 のその何倍ですか。  
2 倍 10 倍 32 倍
- 地震には、大きく二つに分類されます。海溝型（海洋型）地震ともう一つは何ですか。
- 津波についての正しい記述はどれですか。  
津波を英語では、big wave という。  
地震が起こると、必ず津波が発生する。  
外国で発生した地震によって、日本に津波被害が起こることがある。
- 震度 5 弱の被害の程度を述べたものはどれですか。  
吊り下げ物は大きく揺れ、すわりの悪い置物が倒れることがある。  
窓ガラスが割れて落ちることがある。  
重い家具が倒れることがある。  
立っていることが困難になる。
- 余震について正しい記述はどれですか。  
時間の経過とともに少なくなる。  
最大余震の大きさは本震のマグニチュードより平均して 1 程度小さくなる。  
普通、2 ヶ月以上続く。
- 10、付近に活断層があるのはどれですか。  
山の辺の道 中ツ道 吉野川

## 解答と解説

- 地震 親父
- 
- 地震は地球のあらゆる場所で等しく発生するわけではありません。プレート境界に沿った帯状の地帯に集中して起こっています。プレートどうしのせめぎ合いが、地震を発生させるのです。
- 地震のエネルギーの大きさを表すのがマグニチュードです。地震計の最大震幅などを用いて計算します。震度は、地震による、ある場所での揺れの程度を表し、同じ地震でも地域によって異なります。
- マグニチュードが 1 大きくなるとエネルギー量は約 32 倍になり、2 大きくなるとエネルギー量は 1000 倍になります。
- 内陸型（直下型）地震
- 津波は英語で、tsunami。海底で大きな地震が起き、その断層のずれが海底に達したとき、海底が隆起したり、沈降したりする地殻変動が生じます。その変動にともない、海水が持ち上げられたり、引き下げられ、津波が発生します。津波は水深の深いところでは、速く伝わり、海岸に近づくと速度は遅くなりますが、津波の高さは高くなります。入江や岬などの地形条件によっては、さらに高くなる場合があります。外国で発生した地震によっても、津波の来る可能性があります。1960年、チリ沖で起こった地震によって、津波が日本の各地に大きな被害をもたらしました。
- は震度 4、 は震度 5 強、 は震度 6 弱  
気象庁震度階級関連解説表を参照
- と  
余震はたいていは 10 日ほどで収まることが多いが、地震によっては、完全になくなるまで何年もかかる場合や三ヶ月に一度、人が揺れを感じるような余震が起こることもあります。
- と  
は奈良盆地東縁断層帯（三百断層）、 は、吉野川に沿って第一級の活断層である中央構造線が走っています。

発達段階	高等学校	教科等	特別活動		
タイトル	学校(避難所)の様子を通じて自分(ボランティア)の役割を考える				
実施日(月日)					
所要時間	5分	15分	15分	10分	5分
展開	導入	調査	活動	発表	まとめ
達成すべき目標	災害時の学校の様子を知る	避難所の具体的な様子を知る	生活用の物資、救援物資等を考える	物資の活用法とボランティア活動の関連を理解する	学校が避難所となった場合のボランティア活動を理解する
生成物	・避難所生活の様子を理解 ・学校の立場を理解	避難所生活の具体的な様子を理解	・非常持ち出し品や生活用品がどのようなものか理解 ・ボランティアに対する意欲	ボランティア活動の実践意欲の向上	学校として災害時に必要なことを理解
学習単位	全体	グループ	グループ	全体	全体
進め方	学校が避難所になる理由を写真等から考える。	地震発生 復旧作業の生活の様子で、人の動きを調べたり、避難所としての学校の役割を考えたり、教育活動の継続について調べる。	避難所生活で必要物資を考えたり、自宅にある生活物資を運ぶことなどを考えて、学校で備える物や、各自で持ち寄るもの、必要品を書き出し、さらに、ボランティアとして活動ができるか、内容など考える。 (大きめの付箋紙で分類)	・発表をすることで(それぞれのグループから)災害後の様子について考える。 ・生活用品などを持ち寄った結果で、共同生活やボランティア活動など具体的に考えられたか検討する。	具体的に自分のできることを、ボランティアの具体的な内容がイメージできたか考える。
ツール(準備物)	震災時の学校(避難所)で兵庫県南部地震データ集、写真集、(9-6)避難所になった学校 <a href="http://www.kobe-c.ed.jp/shizen/strata/quake/">http://www.kobe-c.ed.jp/shizen/strata/quake/</a>	静岡県富士市のホームページから「東海地震への理解を深めましょう」 <a href="http://www.city.fuji.shizuoka.jp/cityhall/soumub/bousai/jisin/">http://www.city.fuji.shizuoka.jp/cityhall/soumub/bousai/jisin/</a>	・大きめの付箋紙1人10枚程度 ・整理するために貼り付ける模造紙		
場所	コンピュータ室				